

海外体験いろいろ (91・1・18)

G・M・Aグテレス (昭24・理一修)

グテレスです。私は昭和二十二年理科一組の入学です。

まともにいっていけば二十五年の卒業、少し遊んでいたもので二十四年の一修で京都の薬学を出ました。富井さんから喋る前に少し経歴を話せということなので……。

私の家グテレスというのは明治維新直前か直後ぐらいにマカオから、おそらく香港上海銀行の行員として来たのだろうと思います。私で四代目です。私のマカオから来た曾祖父も日本人と結婚し、私の祖父も私の父も私も日本人と結婚して居ますので、おそらく血液学的に言うともう日本人と言っているのだらうと思います。しかしポルトガルも日本も国籍法が血統主義なので、ポルトガル人の子供は何処で生まれてもポルトガル人だと、また日本は日本人の子供でなきゃ日本人じゃない、日本で生まれても日本人じゃないと。こういうたまたま二つの合致によりまして、私の子供なんか五代目ですが全部ポルトガル国籍です。おかげでポルトガルのEC加盟が認めら

れた、というかECがまとまりましたんで去年の1月に新しいパスポートを取りましたら、パスポートはECパスポートで十年間有効です。

ヨーロッパの何処へ行つても皆さん税関・入国管理を通るのですが、私だけは「ECパスポートholder」というところをスーッとぬけるだけで、パスポートなんか見てももらえませぬ。それともう一つは、ヨーロッパではECパスポートを持って居ればどこでも働けるといふ非常に楽な時代が来たようです。私は一九六一年、昭和三十六年、ここに御出席の木村桂造さん（昭十八）のお伴をしてポルトガルへ赴任いたしましたして、それ以来二十四年三カ月、ヨーロッパ・中米・アメリカと海外勤務を続けて一九八五年、昭和六十年九月に日本へ帰って来ました。その間に会社の費用で休暇として日本に帰って来たのは三回だけです。他には色々何回も帰って居ますが、親父が死んで帰ったり、子会社の契約更新とかそういうのが何回かありましたが、純然たる休暇帰国というのは三回です。皆さんの中にも海外勤務の経験の有る方が多いと思います。私は今でも記憶しておりますが、神谷 洋さん（昭十七・3）がネパールだったか、ブータンだったか、或はアフガニスタンですか道路建設を終えて帰られた時に木村さん達と一緒に、どっかで集まって現地のお話を写真を見せてもらいながらうかがった記憶があります。自分がその後、二十五年も出っぱなしになるとは思ってもいなかっただけですが……。当分の間出向を命ずるといふ辞令を貰いまして、その「当分」が二十五年にもなってしまうました。ポルトガルは我々が行きま

した時は、サラザール政権がもう爛熟期を迎えておりました。我々の行った年の暮れに無抵抗主義をかゝげて居りましたインドによるポルトガル領ゴアの侵略がありました。その翌年ぐらいからアフリカでアンゴラの独立運動だとかモザンビークの独立運動が活発になり、ポルトガル軍により捕獲された兵器を見ますとソ連製の兵器、中共の兵器、旧ナチス・ドイツ軍の兵器、それからベトナムで作られたソ連兵器のコピー等いろんなものがあつて、まあよくこんな遠いところまでつまらん手助けをするものだと思つて居ましたが、自分が後でそういう革命の中に巻き込まれるとは、その時は夢にも思つていませんでした。

昭和三十六年（一九六一年）から昭和四十三年（一九六八年）までポルトガルに居りまして、そこで二人目の娘と長男をもうけました。ですから私がさつき申し上げた国籍法でいきますと、私の次女と長男だけがポルトガル生まれのポルトガル国籍、長女は日本生まれのポルトガル国籍、私も日本生まれのポルトガル国籍、家内は日本の国籍と結婚によるポルトガル国籍取得の二重国籍です。外地勤務のありふれた、みなさんの経験されたようなことはあんまり興味が無いと思いますので、私がニカラグアで経験しましたマナグの大地震のときのこと、それから昭和四十九年ぐらいから活発になりましたニカラグアの革命運動、それが一九七九年、昭和五十四年にソモザ政権の崩壊によってサンデニスタ共産革命が成立するまでの間に色々普通では経験できなかったことを体験しましたので、主としてその辺を中心に怖かったこと、今思えば面白かったこと等

を話したいと思います。特に昨日今日、アメリカ多国籍軍と称するものとイラクの戦いの火蓋が切られた直後にこういう話をするのは何か関係があるのではないかと思ひます。

お手元にお配り致しました地図の一番最初のものは、ポルトガルがヨーロッパの端っこにあるということですね。イラクともそんなに遠くは離れていない。二ページ目はポルトガルの地図なのですが、ハイライトしてありますエスタレージャーという所に木村さんの設計された工場が今でも建っています。私は一昨年、二十二年ぶりに三〇周年の式典に参列して参りましたが、現在年七万五千トンぐらいの工場になっております。年三千トンぐらいでスタートした工場が三十年の間に年七万トンになっております。それと、アペイロというもう一つハイライトしてあります所へ液化ガスタンカーで塩化ビニールモノマーを持ち込んで球形液化ガスタンクに受入れ、ごく最近パイプラインが出来たそうですが、二十五km程のところをパイプラインで圧送してエスタレージャーで塩化ビニールの生産を行っています。三枚目は中米のニカラグアです。多分日本でも新聞にニカラグア革命、それからニカラグアの地震などの記事が出たと思ひます。一九六八年から塩ビの生産、塩ビコンパウンドの生産を始め、ソモザ政権が崩壊する一九七九年まで年四万トンぐらいの生産を行っておりました。ところが革命後は外貨が無いため、去年は一年間にモノマーの手配が出来たのが二千トンという話ですから、年四万トンの工場が全然動いてないという現

況です。ニカラグアの地震というのは一九七二年十二月二十三日、夜中の十二時三十分、リヒタースケールで六・八、極めて浅い直下型の地震でした。我々の工場はポルトガルもそうです。ニカラグアもそうなのですが、日本の耐震の計算が十分してありまして、建てる時にはどうしてこんな厚い鉄骨があるんだ、薄くすれば値段が安くなるじゃないかと現地のパートナーからかなり厳しい批判があったのですが、地震の後にはやっぱりやっという良かったと喜ばれました。

直下型六・八の地震といいますが、窓にはめる七千から一万BTU程度のルームエアコンのこういう大きいのが十畳とか十二畳の部屋の窓から向こう側の壁にそのままぶつかって、当たったセメントブロック積の壁にへこみが出来るといふ程度の力があります。それから、ベッドの上に寝ていたらベッドから放り出されます。そのくらい強いものです。直下型と言いますが、マナガという町は旧火山湖の底に位置しており、言いかえると外輪山の底にあたる所でして、すぐそばに活火山がまだ二つぐらい硫黄煙を上げて居ります。本当にそれこそ二、三km、或いはひよつとすると四、五kmぐらいの深さの直下型です。冷蔵庫、ジェネラル・エレクトリックの家庭用の一番大きな冷蔵庫もひっくり返りました。ガスの調理台（業務用火口4ケのサイズ）も全部ひっくり返るのです。一〇〇kgボンベのプロパンガスのシリンダーを二本連結で立て、下を鉄のベルトで締めてあったのですが、それも倒れて居ました。それから家の壁の上部に横のビームが入って居るのですが、五センチメートルぐらい割れて開き中に入っている鉄筋が延びて居るのが見え

ました。家が完全にこう、お鉢を開いたような形になって天井と壁の間に全部五ミリから一センチくらいずつ隙間が出来て居る状態になりました。

それからマナガの町で一番古いグランドホテルで三階建ての鉄筋構造に四階、五階と継ぎたしたのがあったのですが、継ぎたした四階が潰れてしまひまして、五階建てだったのが四階建てになつてしまいました。そのホテルにたまたまその時マナガに出張中の三菱電気の技術屋が四階の部屋に滞在中でしたが、ベッドの頭部のヘッドボードとつぶれて落ちて来た天井がつくつた三角形の中へ一晚、翌日の朝十時ぐらゐまで閉じこめられました。五階には三井物産の新支店長が着任して未だ家族と一緒にこのホテルに滞在中で、翌朝たまたまカメラを取りに戻つた時に、日本語の助けてくれ、助けてくれという声が聞こえて、あ、下に三菱の人がいたな、というので大使館へ行って何人か応援を求めて、それで彼は救出されました。彼は十日程後に日本へ帰り成田空港でしたと思ひますが新聞記者の地震はいかがでしたか、と言ふインタビューに對する記事が出ていたのをしばらく後で読みましたが、まだ頭がおかしかったのではないかと思ふ様なことを盛んに新聞記者に喋つて居りました。なにしろすごいパニックだったのでしよう。たまたま十二月二十三日なんていいいますともう、マナガ辺りはクリスマスや正月になると爆竹を鳴らすという習慣がありますので下町には露天の花火屋が軒をつらねて出ておりまして、地震のときにガソリンスタンドが爆発して、その火が露天にあつた花火屋の花火に入ったものですから、マナガの下町

は地震の五分ぐらい後から火の手が上がり、我々が上の方から見て居ましたら下町は盛んに燃えて居ました。死傷者がだいたい公式発表は八千人と言って居りましたが、非公式では一万から一万二千人ぐらい死んだのではないかと言われて居ります。

木造でトタン屋根の家が多かったのですが、壁が日本と同じ様に割竹を格子に組んでそこへ壁土が詰めてある。日本の地震屋さんに地震後調査に来られた時に教えられたのですが、日本でもこの方法を使つて居り、これはあどべ式と言うのだそうで耐震構造だそうです。マナグでは一九三〇年代にも大きな地震があつたそうで、屋根が全部トタン葺きで、上を軽くしてある。それでも家の中で下敷きになって死んだ人が結構な数になつて居りました。マナグは常夏の国なのですが、十二月というのは雨季が終わつて乾期が始まつたところで、かなり乾いて居りましたが、それでも三日目ぐらいからマナグの町は通れないぐらい死体の匂いが充満して居ました。それとパニック後の群衆というのは恐いものです。まず崩れかけたスーパーマーケットに入り込んで食糧品の略奪を始めます。その他にも例えばタイヤを扱つて居る店ではタイヤをみんな持つて行きます。自分でトラックを持つて来て積み込んで行くのです。老姿が潰れかけた家の中に入って出て来たときはGE社製の大きな冷蔵庫、我々でも二人掛りで動かすような大きいのを背中におぶつて出て来るのを目撃しました。とても普通では信じられない力が出るのですね。欲と力と二人連れなんでしょうか、今まで自分達の生活の中に無かつたものを持つて行こうというようでした。

もうなにしろ秩序も何も無い状態でした。私は、十二時三十分に地震がありました。まず一番に考えたのは工場は大丈夫だったかなと思ひまして、すぐ出掛けようとしたら家内に、工場も大切だけど私達のことも考えてほしいと言われまして、一時間だけ家に居ました。その間にも何回もくく揺り返しがくるので、車のエンジンをかけてラジオのスイッチを入れ、何処から何か地震の情報放送が入るだろうかと思ひて聴いたのですが、当時のあの辺りでは午前二時頃になつても何にも入つて来なかつたですね。車を出そうと思ひてガレージの鉄の観音開きのドアを開けようとしても、家全体がひずんでいて開かないのです。仕方が無いので大きな釘抜きを持って行つて、テコで持上げ、門を抜いて、ドアの前を少し掘つて、やっとドアを開けて車を出しました。家の中の瀬戸物という瀬戸物は全部割れてましたし、工場へ行こうと思ひて走り出したら、丁度火山湖の淵を通つている道路を通るのですが、中央の白線のところがひび割れてズレて居り、二〇センチくらい開いて段差が出来て居るんですね。その時は夜中ですから判らなかつたのですが、次の日の朝になって道路からみると、一〇〇米以上ある火山湖の壁がバサバサくくと土と石が湖に向かつて落ちるんですね。また揺れてるなと思つたらガラガラガラと落ちる。余震だけで八〇〇回あつたそうです。工場へ行きまして、幸いにも丁度クリスマススの定期修理のためストップして居たため、全然ガス漏れも無く、夜勤の連中は心配だから家へ帰らしてくれ、と言つたので交代で帰ることを許可しました。たまたま二十三日は給料日でその日の午後小切手を現金に替えてあり

ましたので、夜勤の連中に指示して翌日の朝一番に一五〇km程離れたニカラグアに於ける第三の街レオン市へ食糧を買い出しに行かせました。食用油と米と豆と他に買えるものがあつたらトラック一ぱい買えと。五トン車一杯の食糧を三五〇人の従業員に配給して地震後の食糧値上りを約二ヶ月持ちこたえました。

ソモザ政権は下からのつき上げと米国政府の圧力によって、ペレストロイカだと称して自分の気に入った三人の閣僚に政治を任せて引退して居りましたが、二十四日の朝、非常事態宣言を行い、また大統領に帰り咲いて、復興だ復興だと指揮して居りました。その頃キューバからも、飛行機が救援物資や薬品を積んで入ってくるのですが、飛んで来たキューバの連中は、サンデニスタの仲間でなければ救援物資は渡さないと主張し、国警軍は、マナガ空港でゲリラに品物を渡すことは許可しないと口論の末、キューバの救援機は救援物資を降すことなく、またドアを閉めて離陸していったそうです。アメリカは今も使われている大きなC-119Cと云うのですか、輸送機に野戦病院が乗って居る編隊を送り込み、降りたところでトラックがそれぞれ数台出て来てテントを設営して野戦病院を作り、そこで負傷者の手当てをしていました。

日本はいつも思うのですが、今度もどうなるのか判りませんが、対応がおそく、最初に送ってきたのは地震調査団で建設者と厚生省と警察庁ですか、警視というのが一人と明治大学の講師で地震専門家というのと、何しろ六人のメンバーが来られて、地震のときに実際にどうすればいい

か話を聞かせてほしいと言うことでした。それよりここへの救援はどうなっているのですかと聞いたら、それは我々の管轄じゃないからわかりませんと言うことでした。大使が肩身の狭い思いをして、何とか救援を出してほしいと要請されて居りました。私どもの会社からはすぐ一〇〇万ぐらい救援金が来ました。ところが日本政府が送ってきたのは地震後、一カ月ぐらいたってからです。その間、我々は工場を稼働させて居りましたので、別に大したこと無かったです。大使、公使は非常に肩身の狭い思いをされていました。私も家が空襲で焼かれて、空襲のときに伊丹の飛行場近くの動員されていた工場から神戸まで歩いて帰った経験が数回ありますので、こんな時にはまず何を用意すべきか、と考えたら食糧の確保と水の確保だと思ひまして、食糧を買い込ませたことと、水は会社の井戸で汲んでドラム缶で会社のトラックを使って生き残ってる連中に配給して歩くということをやりました。

アメリカ大使館員の友人の話では倒壊した大使館の代りに一九三〇年代に建った素晴らしい大使の公邸を大使館として使用したのですが、こゝでも水が無いものですから水洗便所が使えなくて、大使の夫人がヒステリーを起こすのだそうです。しかし他に方法もないのでみんなそこへ行つて便所を使用するため、公邸内が全部臭つたということでした。私はたまたま行かなかつたので知らなかつたのですが、アメリカ大使館の友人の連中がそう言つて大笑いして居りました。我々のところは会社の井戸水で何とかしのぎました。電気が継がつたのはやっぱり一週間ぐらい

かかりました。

そうこうしているうちに、大統領に帰り咲いたソモーズがマナガ復興のためトラックを全部提供しろと指令して来ましたが、我々のところは工場が無傷だからトラックなんか提供出来ない。電気がくればその日から工場を動かすからと言うことで、朝十時の大統領官邸に於ける打ち合わせ会に、まるで西部劇に出て来る様に三十八口径のピストルをぶら下げて、毎日出席してその日その日の大統領府の指示及び情報を聞いて対応した、というのが最初の十日間でした。それから三カ月ぐらいは毎日、あそこで略奪があった、ここで暴動があったと言う様なことで、だんだん完全に潰れたマナガの街から人が外へ出るに従って略奪なんかも外へ広がって行きました。

二十四階建ての中央銀行とバンク・オブ・アメリカの二十四階建ての建物が、メインストリートの中腹に向かい合わせに建っていたのですが、半年程して中央銀行が四階から上は取り崩すこととなりました。曲がってしまった様でした。バンク・オブ・アメリカのビルは同じ二十四階でしたが、構造が全く被害をうけて居らず、そのまゝまた使用することになりました。政府の仕事を請け負った連中がリベートに鉄筋を食ったり砂利を食ったりしたのだろう、相変わらずだと言う話の後でなりました。たまたまその頃、日本電気が中米のマイクロウエーブ回線の設置を行っており、日本への地震の第一報は、マイクロウエーブのサービスイ線線揺れてる最中に日本に入ったそうです。だがその時夜勤していた日本電気の人は、地震です地震ですと報告しただけで、

地震の結果どうなったかということとは全然報告されなかったそうで、日本では地震があったらしいが日本人が無事かどうか判らないという有様だったようですね。地震が一九七二年で地震の後しばらく反ソモーズのサンデニスタゲリラの動きは収まって居りましたが、一九七九年昭和五十四年の六月にソモーズ政権が崩壊するのです。

ニカラグアの地図にありますように、だいたい南のコスタリカとの国境、それから北のホンジュラスとの国境の向う側にゲリラがいますして、国境を越えてニカラグア領内に来てはパチパチとやる、反撃されると向う側へ逃げるといふことのくり返してました。本当のニカラグア人のゲリラ部隊に、パナマ、コスタリカ、アルゼンチン、コロンビア、それからキューバの革命の好きな連中が混っていたようです。チエ・ゲバラの影響を受けた、どこでもいいから革命があったら行くといった連中が参加して居りまして、いよいよ革命運動が激しくなってきたら、反ソモーズの旗頭であった新聞社のチャモロ社長（現ニカラグア大統領ビオレッタ・チャモロの夫）が殺されました。新聞発表ではソモーズの国警軍が殺したと言いますが、私はどうも共産革命軍の連中が、チャモロ氏が必要じゃなくなったからというので、これを殺せばソモーズが非難を受けるだろうという計算の上で殺したのではないかと思えます。この事件と、そのあと市街戦が激しくなった時にアメリカのテレビカメラマンが殺されました。それを、もう一つのテレビ局が殺される現場をビデオに撮って居りまして、それがアメリカで放映されて、結局ソモーズ政権崩壊の最後の引

き金になったのではないかと思いません。

その前のことですが一九七八年、昭和五十三年の十一月九日に私の家にゲリラが八名で入って来て、猟銃、ライフル、カービン銃すべて狩猟用の鉄砲なのですが、全部持って行かれました。家には武装した夜警がいたのですが、その当時、武器を集めるためにと称して、ゲリラが鉄砲を持っているような家に押し入っては鉄砲を持って行く事件が頻繁に発生して居り、私の所も警戒はしていたのですが入られました。私の横腹に三八口径のピストルを突きつけていたゲリラは若い男の子で、多分一五〜一六才、私にピストルを押しつける手先がぶるぶる／＼震えているのが感じられるのです。この子、一人ぐらいいは何んとかなると思いましたが、女中と夜警とがソファーに座らされて、センターテーブルをはさんで、こちら側の椅子に一人、両手で三八口径を構えて見張りをして、一人が門の前に停めてある車の中で見張っていて、あとの五人で鉄砲を運び出して居ました。私の家内は寢室のベッドの前に立って居りまして、ゲリラが出てこいと言ったら出ていったって出ていかなかったって同じでしょ、と冷たく返事をして居ました。それで、どうしてあんな所に立って居るのかな？と思ひ、考えているうちに、ああ、あそこに銃身が三〇センチぐらいしかない連発散弾銃がありました、アメリカのライオットガンと称して近距離で撃つと散弾がわっと広がって、暴動を抑えるためにアメリカの警察機動部隊が使う散弾銃ですが、それが置いてありました。その前に立って銃を体でかくして居たのです。結局子供の空気銃まで全

部持ち出して、ガンケースの下に入っていた弾を百発ほど持って行かれました。引揚げるときに電話線を引きちぎろうとしているから、電話線なんか引きちぎらなくてもこうやって抜けば抜けるじゃないかと言うと、ああそうかと言って差込みジャックを抜いて行きました。

それから私にピストルをつきつけた時に、君達、これはインターナショナル・インシデントだよ、私は外国人だよ、こんな事をしたら却って革命のためによくないよと説得したのですが、問答無用だと言うのです。私達の革命にはどうしても銃が必要なのだと、しかしこんな散弾銃ではケンカにならないよと言ったら、いやあ構わない、ライフルがある、カービンもあると言うのです。だけどこんなライフルやカービンは標的を撃つもので、人を殺せるものじゃないよというのと、いやあ、問答無用だと言って行ってしまいました。それで翌日本社に昨夜こういう事があってゲリラに襲撃されました、と報告しましたら、即刻退避しろという命令がきましたが、今退避したのではどうしようもない。それでは私は退避を命じたよと言うから、退避命令は受けました、私は自分の自由意志で残らせていただきますということで残らせてもらいました。七十九年になりましたら、メキシコへ会長と担当の重役が来まして、会いに来いと言うので行きましたら、もう引き揚げろと言われました。それともう一つは誘拐される恐れがあるから、誘拐されては困るんだということでした。その前にサルバドルで日本の合弁事業の社長が誘拐の上殺され、その後任として来たもう一人の重役がまた誘拐され、何千万か億という金をかけて二人目は無事

に帰って来たのですが、我々もそういうことになっては困るから引き揚げろと言われました。

しかし革命の市街戦も起きて居ないのに我々が引き揚げたら、その後、どう仕様もなくなりますので危なくなるまで居させてほしい。その代わり、情報だけは毎日チェックして危ないと判ったら逃げますからという条件で、一九七九年六月十七日が革命成立の日ですが六月一日まで現地に留まりました。革命の後、八月に戻りましたら、今まで面倒を見てやった現地の連中の中に何人かは革命軍のメンバーで、なおかつかなりの地位にいた連中がいて、工場が無事に残ったのは、私達がサンデニスタに事前に話をつけてあったからだ、と、言われまして、今後とも経済的に援助してほしい。然し我々が運営するから経営には口出ししてくれらなと言われ、これではとてもじゃないがやっていけないというので、私は八月末に折角戻ったのですが再びヒューストンに引き上げて、それからアメリカの合弁会社へ転動して一九八五年、昭和六十年までアメリカ勤務をして帰ってきました。

私は戦争のときに家も焼かれ、最後の一週間、毎日艦載機に機銃掃射されました。こういう体験はもうこれですんだと思っていたのですが、そうはさせてもらえずに地震とその後の革命と二度、昭和二十年に経験したようなことを経験して帰って来ました。しかし今考えたとあの時は面白かったなと思うことも多々ありますが、よく生きて帰ったなと思うこともあります。今の様に戦争がはじまったよと高嶺の見物で、この影響がどうい風に出るかなんて言ってもらえるのは楽

なものだと思えます。

地震のときも革命のときもそうなのですが、内部にいますと情報が両方から入ってくるのですがお互いに自分に都合のいい情報しか流さない。それに引き換えて今の状態ですと何を聞いても、皆、米国側の発表でもイラク側の発表でもだいたいあんまり的をはずれて居ない情報が、入ってくるということは結構なことだと思います。昨夜テレビを見ながらつくづくそういうことを思っておりました。

とりとめのない話ですが、これで私の話を終わらせていただきます。

(信越化学(株)研究開発部兼サンディエゴ駐在)